

新 刊 紹 介

Olivier Cabon, Vincent Francigny, Bernard François, Marc Maillot, Mohamed Musa Ibrahim, Odile Nicoloso, Claude Rilly, and Olivier Rolin 著
『Histoire et civilisations du Soudan: de la préhistoire à nos jours.』

éditions Soleb / éditions Bleu autour, 2017年,
960頁, 49€

坂本 翼 (京都大学)

アフリカといえばまずエジプト、と口走ると、本学会の諸学兄から丁寧なご批判を頂戴する羽目になりかねない。何を隠そう、筆者もその一人だ。エジプト、特にその古代史が大衆の興味を惹きつけて止まないことは紛れもない事実だが、ひとたび目を転じると、グレート・ジンバブウェ遺跡を引き合いに出すまでもなく、古代エジプトに勝るとも劣らない文化・文明がアフリカ各地に存在していたことが了承されよう。現在のスーダン共和国を中心として興ったクシュ王国はその一つの好例である。ただしことスーダンのみに限ってみれば、我が国の学術的関心の多くは人類学的・言語学的・政治学的見地に根ざしており、ひるがえって、古代エジプトに代表される地中海文明とアフリカ内陸部の間隙を埋めうる歴史的断片が等閑視されがちのように思われる。とすれば本論の目的は、スーダンの古代史から現代史までを余すところなく描き出す大著をここに紹介することで、上述の間隙を幾ばくか埋めるとともに、周辺地域を専門とする諸学兄とささやかな対話を試みることである。

全960頁を数えるこの浩瀚な一冊は、コレージュ・ド・フランスの教授、ニコラ・グリマル (Nicolas Grimal) が編纂主幹を務める「エジプト学研究叢書」の第15巻に出版されたもので、編者であるオリヴィエ・カボン (Olivier Cabon) を筆頭に錚々たる面々が共同執筆者に名を連ねる。その面々とは、フランス国立科学研究センター主任研究員クロード・リリー (Claude Rilly)、在スーダン・フランス考古学研究所所長ヴァンサン・フランシグニー (Vincent Francigny)、同研究員マーク・マヨ (Marc Maillot)、元駐スーダン欧州連合代表部長ベルナール・フランソワ (Bernard François)、元駐スーダン司書官オディール・ニコロソ (Odile Nicoloso)、小説『ポートスーダン』でフェミナ賞の栄誉に輝いた文豪オリヴィエ・ロラン (Olivier Rolin)、及びデザイナー、作家、造形芸術批評家としてスーダンを舞台に広く活躍するモハメド・ムサ・イブラヒム (Mohamed Musa Ibrahim) の7名で

ある。専門分野の垣根を超えて編まれたこの類い稀な一冊は、ルーブル美術館で催された展覧会「メロエ：ナイルの古代王国 (2010年)」の特別内覧会で構想されたもので、コレージュ・ド・フランスやスーダン考古学といった関係機関の援助を受けてこのたびめでたく出版の運びとなった。本書は、前書 (pp. 8-17)、序文 (pp. 18-25)、索引等 (pp. 896-960) に加えて次の6章で構成される。

第一章 「スーダンの歴史：その始まりからフンジ王国の終わりまで」 (pp. 26-445)

第二章 「考古学調査の100年」 (pp. 446-471)

第三章 「都市世界としてのメロエ王国」 (pp. 472-519)

第四章 「サイ島、考古学の宝」 (pp. 520-539)

第五章 「1820年から現在までのスーダン」 (pp. 540-751)

第六章 「今日のスーダン」 (pp. 752-895)

800点を超えるカラー写真を随所に散りばめたこれら6章は、二つのグループに分けることができる。一つは、第一章、第五章、第六章から成る歴史的解説で、その分量が書籍全体の約8割を占めることから推察されるように、より重きが置かれているのはこちらである。もう一つは、第二章、第三章、第四章から成る考古学的解説で、こちらは、メロエ王国時代の遺跡紹介を中心に、先述した歴史的解説を補完する内容となっている。一般向け歴史概説書でありながらも極めて高い学術的水準を備えた本書は、英語ではなくフランス語で書かれていることがやや難点だが、現時点で、スーダンの古代から現代までの一望を可能とする最良書と呼んでしかるべき出版物である。紙面の都合上、全編の紹介は到底叶わないことであるが、第一章、第五章、第六章をかいつまんで以下要約し、以って本書のその重要性を広く喚起することにした。

第一章は、スーダンの旧石器時代から1820年まで、すなわち、かの有名なムハンマド＝アリーがフンジ王国を滅ぼすまでを扱っている。時間幅にして15万年にも及ぶその歴史を克明に記さんとしているのは、北東アフリカの言語学、特にメロエ語の世界的権威として名高いクロード・リリーである。記述の大半は、前1千年紀から後4世紀にかけてスーダン、より正確にはヌビア地域に花開いたクシュ王国をめぐるものとなっているが、ヌビア地域で最古の階層化社会を成したAグループ文化 (c. 3800-2800 BC) やケルマ文化 (2500-1450 BC)、あるいは該期の東部砂漠に広がっていたCグループ文化 (2300-1500 BC) についても最新の学術的知見が示され

ており、読者の理解に資するところが極めて大きい。以後、エジプト植民支配時代（1500-1069 BC）及び数百年の暗黒時代を挟んで黄金期を迎えるスーダンには、上述のように前1千年紀から後4世紀にかけて「クシュ」と呼ばれる王国が存在していたことがわかっている。古代エジプトの文化伝統を色濃く受け継いだこの王国は、前1世紀末頃にローマ皇帝アウグストゥスと和平協定を結ぶほどに勢力を拡大するが、その栄光も東の間、後4世紀中葉にアクスム王国の軍事遠征を受けまもなく衰退する。そしてこの衰退が、短い移行期（AD 350-543）を挟んで連綿と続くキリスト教時代（AD 543-1500）の幕開けとなった。ノバディア、マクリア、アロディアという三つの王国を舞台として繰り広げられたこの時代の歴史は、我が国において殆ど顧みられることはないものの、後652年にはバクト（Baqi）と呼ばれる和平協定がアラブ勢力との間で締結されており興味深い。最終的にこれらの王国は、フンジと呼ばれる異民族によって16世紀初頭に取って代われ、今後は彼らの王国が、1820年まで歴史の表舞台を賑わすこととなる。

第五章は、1820年からスーダンの南北分裂、及びその後の内戦の様子を扱っている。本章の出発点となるフンジ王国の終焉は、大局的に捉えれば、キリスト教世界からイスラム教世界への移行を象徴している。移行後しばらくしてエジプトとイギリスの政治介入を受けるスーダンが、ヒキムダール（hikimdar）と呼ばれる総督によって統治されていたこと、あるいは、マフディーによるチャールズ・ゴードン殺害によってこの統治が一旦終りを迎えることは、比較的良く知られるところとなっている。ただ、周知の通りマフディーの覇権もまた長くは続かなかった。1898年9月2日、オムドゥルマン郊外でマフディー軍はホレイショ・キッチナーに敗れ、翌年1月19日、スーダンは再びエジプトとイギリスの統治下に置かれることとなる。以後現在に至るまでの歴史的流れは、本学会の諸兄弟が精通しているところであろうし、また、筆者の専門分野を大きく外れもするため割愛するが、本章を読めばさらなる理解が得られることは改めて強調するまでもない。

第一章と第五章がスーダンの歴史的盛衰を描き出しているならば、第六章は、スーダンの社会的・経済的・宗教的特徴を様々な角度から切り取るものとなっている。細かな項目立ては、順に、「今日のスーダン」「ハルツームの装い」「田舎と村落」「居住者」「難民」「女性の立場」「結婚式と葬式」「宗教」「食料」「芸術家」である。スーダンの人口や民族構成といった基本情報はもちろんながら、従来余り語られることのなかった田舎暮らしや難民の実態、果ては小説や音楽、建築、造形芸術までもがカ

ラー写真と共に活写されており、特筆に値する。

以上が簡単な内容紹介であるが、「われわれの友へ」と題された終章（p. 896-906）が暗示するように、本書は、スーダンとそこに生きる（あるいはかつて生きていた）人々が織り成す歴史、その魅力に取り憑かれた研究者と政府関係者の連携によって世に産み落とされた稀有な一冊であることを最後に強調しておきたい。重厚な解説によって浮かび上がるスーダンの全体像は、考古学者や歴史学者のみならず、人類学者や言語学者、社会学者、果ては広くアフリカに関心を寄せる本学会の諸学兄にとっても示唆深いものとなるであろう。謹んで、ここに本書をお勧めさせていただく。

川瀬慈 著

『ストリートの精霊たち』

世界思想社、2018年、204頁、¥1,900＋税

松波康男（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）

本書の舞台は、エチオピアの旧都ゴンダールのストリートである。このストリートは人々の生活の母胎であるのみならず、人々が生き抜くために強かに自身を表現する舞台ともなっている。本書をより魅力的にするのは、このストリートが、ゴンダールの特定の路地空間（著者の常宿を含む繁華街ピアッサ地区）を指し示しながらも、人々の移動に伴い、それが世界各地へと延伸するさまである。ワシントンDCのバーでの楽師アズマリとの思いがけぬ出会い、フェイスブックを通じたイングランドでの旧友との再会。突如として著者がストリートの只中に引き戻されるよう実感するのは、このような異国での直接的な出会いにおいてのみではない。ドイツのホテルの一室では、北米の先住民男性の歌声を聴き、ゴンダールの吟遊詩人の歌声が著者の身体に響きはじめる。たとえエチオピアから遠く離れていても、さまざまな出来事を契機に、北米、ヨーロッパ、日本においてゴンダールのストリートが突如として現前するさまが、技巧を凝らせた語り口によって描かれる。

本書は、2014年から2016年まで京都新聞夕刊に掲載された文章をもとに加筆されたものであり、「プロローグ」と「あとがき」に挟まれた17の章から構成されている。そのうち第2章、第10章、第14章、第15章、第17章は書き下ろしであるという。著者の川瀬慈氏は、主にエチオピアを調査地として現地の音楽文化に関する人類学的研究を続けてきた研究者であり、同国北部で活動する音楽職能集団と街の人々との濃厚なやりとりを含む数々の民族誌映画等を発表してきた映像人類学者であ

Histoire et civilisations du Soudan

de la Préhistoire à nos jours

Nous devons à la courtoisie de Brice Mainguy, Nippon News Network,
et de l'association amicale franco-japonaise du lycée La Fontaine, à Paris,
la traduction résumée de l'article de Sakamoto Tsubasa, publié, en japonais,
dans le *Journal of African Studies* 94 (2018), 92-93 :

« Tout en étant destiné aux lecteurs non spécialistes, ce livre atteint un niveau très élevé
d'un point de vue académique. C'est pour le moment, le meilleur ouvrage qui donne
une vue d'ensemble de l'histoire du Soudan, de l'Antiquité jusqu'à nos jours.

Le chapitre six mérite une attention spécifique. Il décrit des aspects
jusqu'à maintenant ignorés, tels que la vie à la campagne, la réalité des réfugiés,
ainsi que les côtés culturels comme la littérature, la musique et les arts plastiques.

Ce livre est le fruit exceptionnel du travail de chercheurs fascinés par l'histoire
du Soudan et de son peuple.

L'image de ce pays qui ressort à la lecture de cet ouvrage intéressera non seulement
les archéologues ou les historiens, mais également les anthropologues, les linguistes
ou les sociologues, ainsi que mes collègues de l'association Japan Association for African
Studies. »

Sakamoto Tsubasa (université de Kyoto) — [https://researchmap.jp/](https://researchmap.jp/reado143966/?lang=english)

[reado143966/?lang=english](https://researchmap.jp/reado143966/?lang=english)

<http://www.soleb.com/livres/soudan/african-studies.html>